《論文》

オスマン帝国近代における女子師範学校（一八七〇―一九一八）

――公教育制度の発展と女性教師たち

松尾　有里子

はじめに

一八七〇年、首都イスタンブルにオスマン帝国で初めての公立の女子師範学校（Dârülmuallimât）が開校した。これは帝国臣民の女子であれば宗教・宗派の別を問わず一定の要件を備えれば、誰もが入学可能な女性教師の育成校であった。

一九世紀後半はエジプトで公立の女子学校の創設が宣言され（一八七〇）、日本で学制が公布される（一八七二）など、女子教育が国家施策の対象となった萌芽の時代であった。エジプトでは一九〇〇年に女性教師養成校が、日本では一八七五年に東京女子師範学校が設立されるなど、女子教育制度を支える中核としてオスマン帝国の場合と同じく公立の女性教師養成校が設立された背景は注目に値する。女性教師養成校のあり方に着目することで、その国の公教育、及び女子教育の特徴が明らかになると言っても過言ではないだろう。本稿では、オスマン帝国の公教育制度が浸透し定着していくなかで主に女子師範学校が担った社会的役割に着目していきたい。

オスマン帝国の女子師範学校については、これまで、女性史、教育史、社会学の立場からエルギン（一九四〇―四四）、

アクユズ（一九八二、二〇〇〇）、クルナズ（一九九二）、ソメル（二〇〇〇）、シャナル（二〇〇五）、エルデム（二〇一三）、長谷部（二〇一六）等相当数の研究蓄積がある。[1] これらのうち、制度史的考察を主とする研究により、女子師範学校の制度化の過程や近代女子教育におけるこの学校の位置づけも明らかにされてきた。また、ジェンダーの視点からの分析は女子師範学校が女性の社会参加や政治意識の形成に寄与していた側面を指摘した。他方で、女子師範学校そのものの運営の実態や学生や教師、卒業生などの動向等に着目し、学校の組織内部からの検討はほとんどなされていない。女子師範学校は開設時の入学者が三七人で、途中、学生数が減少し卒業生も輩出できない時期を経験しつつも、一九一六年には七八〇人もの学生が学んでいた。これは近代オスマン社会において、女子師範学校と女性教師というキャリアが時間をかけて認められてきた証左であろう。

女子師範学校は一九一五年、高等師範部が諸学の館（Dârülfünûn イスタンブル大学の前身）の女子部（İnâs-ı Dârülfünûn）となることで、「女子」大学となった。女子高等師範部に関しては、アルスランらの専論（二〇一二）があり、帝国年鑑（*Salnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*）や当時の学生簿などに依拠しながら、開設の経緯、講義内容、学生数などの実態が詳らかにされている。[2] 本稿では、アルスランらの研究手法を一部援用しつつ、一八七〇年の開設時から高等師範部開設に至るまでの時代を対象に、公教育省の文書史料に加え、『イスタンブル女性教師養成校・女子師範学校年鑑（*İstanbul Kız Muallim Mektebi 1933 Darülmuallimat 1870*）』、新聞・雑誌類、女性の手記などを利用しながら、女子師範学校の実態を組織内部から活写していくことを目的とする。なお、女子師範学校は公教育機関という性格上、教師養成校としての本旨は堅持しつつも、各時代の政策により教育行政上はもとより、その社会的役割を変えていたと考えられる。したがってタンズィマート改革期（一八七〇―一八七六）、アブデュルハミト二世期（一八七六―一九〇九）、第二次立憲政期以降（一九〇九―一九一八）を画期とし、女子師範学校を通時的に検証していくこととする。これにより、オスマン帝国近代の社会と女性にとり、女子師範学校がどのような意義を持ち得たのかを再検討する試みとしたい。

第一章　オスマン帝国近代女子教育制度の沿革とその特徴

（一）　タンズィマート改革以前の女性教師たち

女子師範学校について述べる前に、タンズィマート改革以前の女子教育と女性教師について整理しておきたい。

従来、オスマン帝国近代の女子教育研究は、タンズィマート改革以降を中心に行われてきた。なぜなら、近代学校制度の導入を画期として女子が「国民」の一員として公教育の中に位置づけられた点を踏まえ、主に議論と研究がなされてきたからである。しかし、近年ではアクユズ（二〇〇一）や秋葉（二〇一三）の研究により、前近代ムスリム女子の初等教育の実態が明らかとなり、女子教育の制度化の背景を考えるうえでの示唆を与えている。[3] それによると一八世紀後半には女児が通うコーラン学校（マクタブ、トルコ語ではメクテプ mektep）のイスタンブルにおける設置が認められ、そこでは、ホジャ・ハヌム（Hoca hanım）と呼ばれる女性教師たちが教育に携わっていた。女性教師たちの中には自宅で教える者もいたという。筆者が調査したところでは、一七四五―四六（ヒジュラ暦H一一五六）年の嘆願書（irâde）においてトカトのトゥルハルのドアン街区（doğan mahallesi）の女子のメクテプ（kız çocuklarına mahsus mektebi）でルキエ（Rıkiye bint-i Recep）という女性が教師職を与えられたとある。[4] また一七七五年（H一一八六）の文書においても前大宰相のオスマン・パシャの息子アフメト・パシャのワクフとなっているモレアにあるトラポリチェのマクタブの教師エミネ（Emine bint-i Ahmed）の代わりにファトマ（Fatma bint-i Seyyid Mustafa）に同職が与えられるように上奏している。[5] 以上から少なくとも一八世紀半ばにはイスタンブルやそれ以外の都市部においても、ムスリム女子へ初等教育を授け、学ぶ場が存在していたと言える。したがって、タンズィマート改革期以前に都市部を中心に女子が初歩的な読み書きを習う慣習が相当程度、浸透していた可能性がある。一八五九年にイスタンブルで初めて女子中学校（Cevri Usta İnâs Rüşdiyesi）が開校し、[6]

一八六九年に「公教育法（Maârif-Umûmiyye Nizâmnâmesi）」の発布と同時に、女性読者を想定した『婦人版進歩（*Terakkî-i Muhadderât*）』誌が発刊されている事実からも、リテラシーを備えた女子が一定数存在していたことが理解できるであろう。

クリミア戦争（一八五三―五六）後の改革勅令（一八五六）でムスリムと非ムスリムの法的平等が公的に宣言されると、一八五七年に公教育省（Maârif-i Umûmiyye Nezâreti）が発足し、宗教・宗派の別を問わない教育が新式学校を中心に組織化された。初等教育については、各宗教、宗派の既存の教育を選択し学ぶことができ、既存のマクタブは、新式学校の初等教育機関にも部分的に転用された。新式学校では教員不足のため、当初マクタブやマドラサの男性教師が教えていた。しかし、一八四八年にイスタンブルに師範学校（Dârülmuallimîn）が開設されると、その出身者が担当することとなった。一方、女子のマクタブで教えていた女性教師たちが新制度成立時にどのように扱われていたのかは、明らかではない。「公教育法」によると、小学校（mekâtîbi sibyaniye）は男子が七歳から一一歳、女子が六歳から一〇歳まで学ぶと規定され、原則、男女別学であった。女子小学校の教師は女性と定められ、（専門の）女性教師の養成がなされるまで（Kadınlardan matlub-ı vechile muallime yetiştirilinceye kadar）は、年長で品行方正な男性が教師を務めると規定されていた（七一条）[7]。したがって、法令上は新式学校制度の発足時にこれまでの女性教師たちは排除されていたようだ。しかしながら、近代改革以前から、初等教育の担い手として社会で女性教師が活躍していた事実は、女子師範学校の成立を考える上で、理解しておくべきであろう。

（二）オスマン帝国における近代女子教育制度の成立

「公教育法」によると、小学校入学時の年齢は女子の方が一年早かった。その理由は明らかではないが、教育内容は男女とも同じプログラムであった。小学校では文字の学習（Usûl-i Cedide Vechile Elifbâ）、コーラン（Kurân-ı Kerîm）、道徳

（Ahlâka Müteallik Rasâil）、書道（Yazu Talîmi）、算数（Muhtasar Fenn-i Hesâb）、オスマン朝史（Muhtasat Târih-i Osmânî）、地理（Muhtasat Coğrafya）などを学んだ。[9] 四年間の小学校が終わった後、男女別学でそれぞれが異なる教育内容を持つ四年制の高等小学校（mekâtib-i rüşdiye）に進むことができた。この高等小学校から、男子と女子はそれぞれ分化した学校体系の中で学ぶこととなる。男子は男子のみが進学する高等小学校に進み、さらに三年制の中学校（idâdi）、大学（諸学の館 Dârülfünûn）と高等教育への進学の道が約束されていた。一方で、「公教育法」発布時、女子は一四歳で高等小学校の課程を終了すると、その後の教育は想定されておらず、唯一の「進学」先が高等小学校の教師を養成する一八七〇年開設の女子師範学校であった。[10]

女子高等小学校では何が学ばれていたのだろうか。授業科目をあげると、宗教（Mebâd-i Ulum-ı Diniyye）、オスマン語（Lisân-ı Osmânî Kavâidi）、アラビア語、ペルシア語、歴史、地理、文学（Müntehabât-ı Edebiyye）、計算、裁縫（Nakış）、衛生学などであった。[11] 小学校ですでに学んだ地理や歴史などに家政学を加えた内容で、男子高等小学校における数学などの理数系科目は含まれていなかった。なお、この高等小学校の設立に前後して、小学校を修了した女子を主に対象とした職業専門学校も開校していた。例えば、一八四二年に助産婦（Ebe Mektebi）学校が、一八七五年には女子技芸学校（Inâs Sanayi Mektebi）がイスタンブルに設けられた。後者は主に裁縫、料理など家政学一般を学ぶ学校であるが、その前身は一八六四年にルスチュクでミドハト・パシャ（Ahmed Şefik Midhat Paşa 一八二二―一八八四）が孤児の女児に縫製の技術を学ばせるために開いた学校と考えられる。[12] 一八七〇年開校の女子師範学校も女子教育の担い手を専門的に養成するという意味では、これら職業専門学校の範疇に入れることもできよう。

以上から女子への教育はタンズィマート改革以前より広がりつつあり、女性教師の活躍もあって新しい学校制度が浸透する基盤を提供していたと言えるだろう。しかしながら、新しい学校制度で目指された女子教育とは小学校卒業後一〇～一四歳までの女子を対象とし、高等小学校に進学できるとはいえ、男子とは異なる「女子向け」の教育内容であり、中等

教育以後は想定されていないものであった。ただし、小学校と高等小学校を終えた者は女子師範学校、女子技芸学校などの職業学校に進む道が定められていた。

第二章　女子師範学校の誕生

一八七〇年の帝国官報『諸事暦報（Takvîm-i Vekāyi'）』紙上（ムハッレム月二五日）で、女子師範学校が設立されることが告知された。そこには入学資格として「女子師範学校に入学する女性は一四歳以上、三五歳未満であることが必要である」と述べられていた[13]。これは具体的に入学者として六歳で小学校に入学し、女子高等小学校までを終えた一四歳以上の女子を想定していたと考えられる。開校に先立ち、前年の一八六九年に発布された全一九八条からなる「公教育法」には、女子師範学校の規定が、六八条から七八条まで記されている。以下に概要を整理すると、六八条でイスタンブルに女性教師育成のために小学校部と高等小学校部の二部（şube）から構成される女子師範学校を設立し、ムスリムとそれ以外の宗教共同体臣民のための学校にも派遣できるように、ムスリム課と非ムスリム課の二課（daire）から組織されると規定された。また、小学校の教師になるためには二年、高等小学校教師の場合は三年、通学することが義務付けられた（六九～七〇条）。女子師範学校の教師については女性教師が養成されるまで年長の品行方正な男性教師が務めるとされた（七一条）。女子師範学校に勤務する者の給与は、校長が月給一五〇〇クルシュ、一般の教師が月給七五〇クルシュ、刺繍担当教師（nakış usutası）が月給一五〇〇クルシュ、その他の用務員が月給一五〇クルシュと定められた（七二条）。

学生の入学資格として小学校または高等小学校の卒業証明書が必要であり、それを所持しない者は監督官（mümeyyiz）のもとで試験を受け、その能力によって小学校、高等小学校のどちらかの師範部に入学できた（七三条）。学生のうち、五〇人に給与が支給され、小学校部は三〇クルシュ、高等小学校部は、六〇クルシュが与えられると定められた（七八

条）。学生は卒業後の進路として、小学校部で卒業時に試験を受け、能力を認められた者は小学校の教師となるか高等小学校部へ進学することができた。就職した場合は五年間就業せねばならず、それが果たせない者は在学中の給与を返還する義務を負った（七四～七五条）。また、女子師範学校の卒業証明書（şehâdetnâme）を持つ者はそれを持たない者より、公立の女子校（mekâtib-i umûmîye-i inâs）での雇用（istihdam）を優先されると定められた（七六条）。こうして、公教育の分野で女子教育に従事する専門家の養成が宣言された。

「公教育法」発布後、一八七〇年に第一期生の入学のために試験が行われた。公教育省から大臣のサフヴェト・パシャ（Safvet Paşa）とメジド・エフェンディ（Mecid Efendi）、イルミエ（イスラーム法官・文教組織）からウラマーのムスタファ・エフェンディ（Mustafa Efendi）が出席し、三二人の女性が試験にのぞんだ。試験科目は算術（Amali Erbaa）、地理、アラビア語、絵画、正書法（İmlâ）、筆記法（Sülüs）、刺繍の実習が行われた[14]。

同年、女子師範学校はイスタンブルのスルタンアフメト地区のアヤソフィア・モスクに近いイェレバタンで開校した。公教育省大臣サフヴェト・パシャは公教育省の官僚や教員、生徒の前で開校の辞を述べた。その内容は『諸事暦報』によって伝えられている。ここから女子師範学校の設立の目的と女子教育の理想と現状を知ることができる。

まず冒頭で、母親が家庭で幼い子供の教育に与える影響を述べ、就学後は女性教師が母親の代わりを果たすべきとしている[15]。

次に現在「ヨーロッパでは多くの女性の詩人や作家が出ており、今や彼女たちの敬意ある作品が読まれている」とし、今日、ムスリム女性も同様の教養を身につける必要性を述べた[16]。

その後、これまでのマクタブでの教育での問題点を指摘し、女性にとり、いかに初等教育後の教育が必要であるかを力説した。

「オスマン帝国において今まで女性たちのために（初等教育以後の）学校（rüşdiye）がなかったので、女児は八～一〇歳までマクタブに（引き続き）通って文字を読み、その後、どの女児も家庭で宗教に関する本を読むのが常であった。さらに高度の能力を備えた者たちのための学校がないために、哀れな女子たちはこのままの状態に留まらざるをえなかった。」（　）内は筆者加筆。

さらにハディースを引いてムスリム女性にとり、特に教育が必要でありそれが経済的な利益を自身に与えると指摘している。

「知識を得ることは男性、女性のどちらもムスリムには必要であるとハディースで述べられているように、女性たちは男性たちのように教育を受ける必要がある。（中略）ヨーロッパで多くの女子や既婚女性たちが家で様々な手仕事をしながら暮らしているにもかかわらず、ムスリム女性たちがこのような仕事をせず、何ら物質的利益を得られないでいる現状は残念である。」

最後に女子高等小学校に通う女子のヴェールの問題、女子師範学校内に非ムスリム校へ派遣する女性教師用のクラスを設置するなど開校に関わる具体的な問題について述べている。

「イスタンブルでは女児用の学校がなかったため、彼女たちは男児と一緒に勉強していた。昨年、男女は別れて、教育熱心な我が陛下のおかげでイスタンブルの様々な場所で七校の女子高等小学校が開校された。しかしながら、これらの教師は男性であるため、九～一〇歳の女子たちはヴェールをかぶる必要があり、（örtünme gerekçesiyle）この

学校で二年以上過ごすことはできないだろう。このため、女子たちが女子高等小学校で四年過ごすことが可能なように教師が女性であらねばならない。[17]」

以上の公教育省大臣の発言で注目すべきは、女子師範学校は、宗教・宗派を問わず平等に女性教師の育成を行うとしながら、ムスリム女性の初等教育後の教育のあり方を念頭に置いて設立されている点である。例えば、高等小学校に進学する年齢の九～一〇歳の女子は慣習上ヴェールを被る年頃であるから、教育の場には女性教師の方がふさわしいとしている。これはかつて女性教師が女児用のマクタブで教えていた環境を、新式学校でも作ると述べているのとほぼ同義である。「ムスリム女性も家庭内で手仕事を習得することが望ましい」と述べているのも、当時、縫製の仕事は専ら非ムスリムの女性の仕事であった点を意識しての発言であろう。[18]

開校時の初代校長にはエミン・エフェンディ（Emin Efendi）が就任し、二人の裁縫の教師と絵画担当の一人の教師以外は全員男性であった。[19] 初年度の入学者は三七人とされ、後述するように一八七三年には最初の一七名の卒業生を輩出した。公教育省の文書には一八七四年に「公教育法」の規定に即して音楽の授業に必要なピアノを購入した等、教育環境を徐々に整備していた様子がうかがえる。[20] しかし、同じく新式学校での教師養成を目的として一八四八年に設立された師範学校（Dârülmuallimîn）では一八七六年において一七名の教師と二〇〇名の学生が在籍していたのに対し、女子師範学校では八名の教師と五〇名の学生が在籍していた。[21] すなわち、女子師範学校の場合、師範学校と比べ教師では約半数、学生数では四分の一の在籍数であった。なお、女子師範学校のあるスルタンアフメト地区にはすでに中学校（Idâdi）や陸軍（Harbiye）などの新式学校があり、女子師範学校の開校は周囲の注目を集めていたようである。公教育省の文書によると、これらに通う男子学生が女子師範学校の周りをうろついたり（dolaşıp）不快な思いをさせる（rahatsız etmeleri）ことのないように、しばしば指示が出ていた。[22]

女子師範学校の授業科目は、小学校部では、宗教、オスマン語文法と正書法（Lisân-ı Osmânî ve İmlâ）、道徳、算術、オスマン史、地理、裁縫と刺繍（Nakış ve Hıyatiye）であり、一方、高等小学校部は宗教、オスマン語文法及び作文、アラビア語、ペルシア語、道徳、家政学、歴史と地理、算数と科学の基礎、絵画、音楽、裁縫実技であった。なお宗教科目についてムスリム以外は各宗教共同体の長の決定に基づいて決められた。

表（一）は女子師範学校の年度毎の在籍者と卒業数である。『帝国年鑑』及びトルコ共和国成立後に編纂された『イスタンブル女性教師養成校・女子師範学校年鑑 *İstanbul Kız Muallim Mektebi 1933 Darülmuallimat 1870*』（以下ＩＫＭ）のデータをもとに作成した。[23] 卒業者とは最終学年まで在籍し、卒業試験を受け課程を修了した者を指す。表の推移を見ると、一八八一年以降は増減を繰り返しながらも徐々に入学者と卒業者が増えてきている。これはアブデュルハミト二世時代（一八七六―一九〇九）に女子教育の拡充が行われたことと関係がある。

第三章 アブデュルハミト二世期における女子師範学校

（一） アブデュルハミト二世の女子教育改革

アブデュルハミト二世時代はオスマン帝国憲法を停止し、議会を閉鎖したとして一般的に「専制」時代と解されてきた。しかし、教育制度に関して述べるならば、制度の著しい発展が認められた。女子教育分野においては、女子小学校、女子高等小学校は都市部を中心に拡充され、各地方に普及した。例えば、一八七七年のイスタンブルにおける男子高等小学校は二一校、女子高等小学校は九校（Sultan Ahmed, Şehzade, Aksaray, İbrahim Paşa, Eski Ali Paşa, Eyüp, Üsküdar, Üsküdar Gülfem Hatun, Atapazarı）であり、男子の在籍総数は一七九五名に対し、女子のそれは三〇九名であった。[24] 一八八七―八八年の『帝国年鑑』によれば、女子高等小学校は帝国内に三一校あった（エディルネ三、セラーニキ二、ヤンヤ一、ロド

表（一）女子師範学校の在籍者数と卒業者数（1872-1913）

学年	学年別在籍者数	卒業者数	備考
1872-1873	50	17	校長 Emin　教員 7 名
1873-1874	19/4/8	19	校長 Mehmed Fehmi 教員 10 名
1874-1875	20 /19 /7	20	卒業生の年齢　12~18 歳
1875-1876	（不明）	8	
1876-1877	9/7/6	9	校長 İsmail
1877-1878	30~50	5	
1878-1879	46	0	校長代理 Abdullah
1879-1880	25	0	校長 Fatma Zehra
1880-1881	（不明）	0	校長 Davut Şukur
1881-1882	（不明）	0	露土戦争の影響で閉鎖
1882-1883	193 / 26	15	校長 Refika、Sıbyan/Rüşdiye 部に分化
1883-1884	101/42	11	校長 İsmail Hakkı
1884-1885	（不明）	19	
1885-1886	32	22	
1886-1887	（不明）	30	tezgâh(織物機ミシン)の授業が始まる
1887-1888	32	22	
1888-1889	32	4	
1889-1890	（不明）	15	２年制に学習期間が減少
1890-1891	（不明）	8	
1891-1892	（不明）	17	卒業生 Ayşe Sıdıka 就職、3 年制に戻る
1892-1893	（不明）	12	
1893-1894	（不明）	10	
1894-1895	（不明）	10	元師範学校教師 Mehmed が宗教担当に
1895-1896	（不明）	15	予備門と合わせて 6 年制に
1896-1897	（不明）	13	
1897-1898	（不明）	20	女性教師 11 名に増加
1898-1899	94	26	
1899-1900	（不明）	33	
1900-1901	120/102/128	27	Aliye/ Rüşdiye/ İptidaî の 3 学年編成に
1901-1902	132/113/180	30	校長 Hacı Numan
1902-1903	140/114/163	30	
1903-1904	142/119/181	42	
1904-1905	148/118/191	47	
1905-1906	135/160/138	33	
1906-1907	130/39/95	36	
1907-1908	134/133/156	36	
1908-1909	41/41/45	30	校長 Hacı Sadık
1909-1910	22/29/43	16	
1910-1911	22/29/48	22	寄宿生の受け入れ開始
1911-1912	25/35/40	24	ユースフ・アクチュラが歴史を担当
1912-1913	（不明）	27	校長 Mustafa Refik/Hilmi
1913-1914	（不明）	23	
1914-1915	212/115/134	24	幼稚舎、高等師範部の設置
1915-1916	499/238	34	
1916-1917	276/102/306	96	幼稚舎部在籍（寄宿 220/ 全日 25 名）
1917-1918	722/283	37	在籍者が膨大となり教師不足に
1918-1919	539/236	38	諸学の館女子部設置
1919-1920	485/130/79	83	校長 Ahmet Edip

『帝国年鑑』及び『イスタンブル女性教師養成校・女子師範学校年鑑『İstambul Kız Muallim Mektebi 1933 Darülmuallimat 1870』(İKM)のデータをもとに作成。学年別在籍者は高等小学校師範部の在籍者（三年制）を指す。第一学年と第二学年が合算され二年制として記録された年度、在籍者総数で記録された年度もあり、記載の形式は一定していない。

ス島三、ヒュダーンヴェンディガール（Hüdânvendigâr）一、アイドゥン一、カスタモヌ二、コンヤ一、ダマスクス二、ヒジャーズ一、トリポリ一、ブルガリア一、イスタンブル一一、ルメリ州一[25]。ただし、女子学校が増設傾向にあったものの、ソメルによれば、スルタンの掲げたイスラーム主義の影響から、女子の教育内容はむしろ制限されていたと指摘する[26]。

アブデュルハミト二世は一八八七年公教育省に属する教育委員会で教育改革についての意見を求め、シェイヒュルイスラームのアフメト・エサト・エフェンディ（Ahmed Esad Efendi）を議長とするイルミエ、公教育省の官僚らからなる混成委員会が組織された。そこで提出された覚書によれば、現存の女子の小学校と高等小学校とを廃止し、これらの代わりに四年制の女子校を新たに設立することが提案された。この女子校には六～九歳の女児が通い、九歳が女子教育の最高学年とした。なぜなら、シャリーア（イスラーム法）によれば九歳の女子は成熟した年齢になる（müşteha olmak）からだと言う。この点から現行の女子師範学校も閉鎖されるのが望ましいとされた[27]。

スルタンのこれまでの女子教育制度を否定するかのような提言は実現されなかったものの、一八九一―九二年にイスタンブルで小学校と高等小学校を合わせた六年制の女子校が模索されていたことがわかっている。この修了生は女子師範学校への進学が認められるよう定められていた[28]。

（二）女子師範学校予備門（İhtiyât kısmı）の設立

このような女子高等小学校の改革や増加に伴い、一八九三年には女子師範学校においても女子師範学校予備門（İhtiyât kısmı）が設けられ、本科と合わせると六年制の教員養成コースが生まれることになった[29]。一八九五年の女子師範学校と予備門についての通達（tâlimât）においては、入学資格、試験、校長、教師の職務、学習科目などをが六七項目にわたって規定された。それによると、予備門に入学を希望する場合、監督官（mümeyyiz）の前で試験を受け、合格した者が入

学を許可された。その後女子師範学校へ入学したい場合は、オスマン語の作文（Tezkere-i Osmanîyye）と善行（hüsnühâl）や質（şan）の観点から必要とされる学問の知識や調理技術の証明書と感染病（emrâz-ı sâriye）に罹患していないことを証明する報告書を提出することが義務付けられていた（五条）[30]。また学校の運営に関しては、校長職には男性の校長（müdür）と女性の校長（müdire）が就任することとし、前者はこの通達を実行する能力と責任感の持ち主であること、後者は学校の外部の事柄や文書のやり取り（yazışma）には関わらず内部の事柄に専念することが望まれ、両者は常に、少なくとも週に二回は教室や裁縫の教室を見回ることを責務とした（六～九条）[31]。

アブデュルハミト二世治世中に女子師範学校の教育プログラムは少なくとも二回改定されており、いずれも宗教（Ulûm-ı Dîniye）やコーランに関する授業時間数が確保されている。とくに先の通達発布後一八九九―九〇年度の時間割では、宗教とコーランの読誦と適用（Tecvîd ve Kur'an-ı Kerîmde Tatbikât）の授業が第一学年では週に四時間、第二学年では三時間、第三学年でも三時間あり、アラビア語の授業も三年間にわたり二時間ずつ組まれていた[32]。女子師範学校の授業は教授法（Usûl-ı Tedrîs）を除くと、当時の女子高等小学校の学習科目に沿って教育プログラムが組まれているため、男子の学校では教えられていたフランス語などの外国語は学ぶ機会がなかった。なおこの通達には、試験の合格点や休暇の期日など学生生活全般について細かく定めていた。それによると、各試験の合格基準点は一〇～九（秀 Aliyyülâlâ）、七～八（優 Alâ）、六（良 Karibül âlâ）、五（可 Vasat）であり、それ以下は落第とした（六一条）。また休日は毎金曜日、休暇期間は夏に二二日、ラマダン（断食月）初日と最終日から一週間、巡礼月（Zilhicce）の八日から六日間などムスリムの暦にしたがって決められていた（六七条）。

アブデュルハミト二世時代は女子教育の拡充とリテラシーを備えた女性の増加により、女性を読者にした女性雑誌が数多く発行されたことでも知られている。女性誌も検閲対象となったため、政治的言論、風紀上問題がある記述は統制を受けたが[33]、読者投稿欄や女性編集委員の記事などを通じて、家庭での子供の教育、女子教育のあり方、教育を受けた女性の

将来像などが議論されるようになった。次章では女子師範学校の卒業生の動向と女性雑誌での議論を取り上げながら、タンズィマート改革以来のオスマン女子教育がどのような問題を抱えていたかを考察する。

第四章　女子師範学校卒業生と女子「高等教育」問題

（一）　女子師範学校卒業生の動向―公教育の教師として―

女子師範学校は一八七三年に初めての卒業生を輩出した。公教育省から派遣された監督官のもと、卒業試験が行われ、合格した一七名が卒業した。当時最終学年には二一名が在籍していたが、当日、一人が欠席し三人が試験の解答を終わらせることができなかったという。[34] 一七人のうち、最年長は三〇歳で最年少は一四歳であったという。[35] 同年の公教育省の文書には、息子を亡くし女子師範学校での勉強を中断していたファトマ（Ahıhalı Fatma Hanım）が試験を受けて三年次に復学したとある。[36] 当時独身の女性だけでなく、既婚女性も女子師範学校で学んでいたことがわかる。第一期卒業生のうち、ファトマ・ニギャール（Fatma Nigâr Hanım）がエスキ・アリ・パシャ女子高等小学校の第一教師（birinci muallimligi）に、ハフズ・ルヴェイデ（Hafiz Rüveyde Hanım）がスルタン・アフメトの女子高等小学校に算数（Riyaziye）の教師に、ゼフラ（Zehra Hanım）が同じ学校のリカー体の教師に、ハトチェ（Hatçe Hanım）がファーティフの女子高等小学校に同じくリカー体の教師に、ミュニベ（Münibe Hanım）がスルタン・アフメトの高等小学校の第二教師（ikinci muallimligi）に任命された。[37] いずれもイスタンブルにある高等小学校であった。表（一）中のアブデュルハミト二世期の一九〇八年までの女子師範学校の在籍人数及び卒業生の推移を見ると、一八七八年より四年間卒業生が出ていない。エルギンによれば、露土戦争（一八七七―七八）によるイスタンブルの混乱から二年間閉校せざるをえなかった影響であると言う。[38] また、在籍者に比べ、卒業生が少ない理由としては、卒業試験に合格しなかった場合もあるが、その大半は何らかの事情で

勉学が継続できなかったからである。例えば、一八七四年にはジェネブ、ヒュリエト、アフェトの三人が学習を継続できないとして給与を返還し、退学しているが、理由は述べられていない[39]。

一八七三年に最初の卒業生を輩出した翌年、女子小学校勤務の男性教師アキフ・エフェンディが「公教育法」の規定に従って、女子師範学校出身の女性教師と職務を交代し、他校へ異動となった[40]。「女子教育は女性教師の手で」との原則が実行され始めた。なお、史料的制約から女子師範学校卒業後の女性たちの動向を詳しく追跡するのは、困難である。公的文書には男性の場合と異なり、名前以外の情報がほとんど記載されないからである。また卒業生の全てが教師として就職したとは限らないだろう。表（二）はİKMに就職先が明示されている年度の卒業生の就職先一覧である。

卒業生が母校の女子師範学校に採用されたのは、一八七五年のレフィカ（Refika Hanım）が最初であり、その後は音楽と裁縫の教師は必ず外国人を含む女性が担当した[41]。それ以外の教科の教師としては一八八四年にナキエ（Nakiye Hanım）が歴史を担当し、同年リカー体の教師としてベスィメ（Besime Hanım）が就職している[42]。卒業生で教職に就いた者の多くはイスタンブルの女子高等小学校に就職し、管見の限り地方の女子校へ就職したのは一八九四年にブルサの女子高等小学校に赴任したセイイド（Seyyid Hanım）が最初である[43]。その後、僅かずつではあるが、地方で就職する者たちが増えていった。なかにはアレッポの高等小学校に就職する者もいた[44]。一方、イスタンブルの女子校間では女子師範学校卒の女性たちの異動が頻繁に行われていたようだ。例えば、一九〇〇年の事例でスルタンアフメト地区の女子高等小学校教師のフェリデ（Feride Hanım）が女子師範学校の第二教師に、空いたポストにはアクサライ地区の女子技芸学校教師のサニハ（Saniha Hanım）が就任し、そのサニハ後任は女子師範学校出の女性たちの中からナズィエ（Naziye Hanım）が務めたという[45]。以上のようにアブデュルハミト二世期には一時閉校期間があったものの、「公教育法」に示された通り、女子師範学校出身者が帝国内の女子校に教師や助手の資格で一定数就職していた事実が明らかとなる。

（二）女性雑誌に見る女子「高等教育」問題

女子師範学校出身者の中には、女性雑誌の編集、投稿などを通じて文筆活動に関わっていく女性も認められた。一八八七年、雑誌『花園（şükufezar）』は女子師範学校卒の三人の女性、アリーフェ（Arife Hanım）、ミュニル（Münir Hanım）、ファトマ（Fatma Hanım）によって出版された。この三人は露土戦争後、学校が再開された後の卒業生と考えられ、İKMの一八八五―一八八六年の卒業生名簿に彼女たちの名前を見つけることができる。[46] アリーフェは当時の公教育省大臣のミュニフ・パシャ（Münih Paşa）の娘である。当時ミュニフ・パシャは教育・啓蒙団体「オスマン学術協会」の運営に携わっていたから、この支援のもとに出版されたと考えられるだろう。

第一号の冒頭には「教育を受けた女性のための雑誌」（mekteplı kadın dergisi）と発行の趣旨が記されており、その内容も文学、思想、社会評論、詩と多岐にわたっていた。この点が家事、育児、子どもの教育等を中心とした記事で構成される他の同時代の女性雑誌とは一線を画した内容となっていた。[47] アリーフェ自身「私は女性であるまえに作家である」と述べ、これまでの教育で得た知見と培った才能を披瀝し、雑誌作りを通じて市井の女性たちを啓蒙しようとしていた。当時、女子師範学校は教師養成校ながら、女子教育制度の最終進学先、すなわち最高学府であったから、実学だけでなくさらに学問を究めたいと願うアリーフェのような女性たちも進学していたのではないだろうか。実際、この雑誌や後述する女性雑誌の読者投稿欄を見ても、女子師範学校出身の女性たちの意見が寄せられ、特に『花園』は当時の高学歴女性の文芸サークルの様相を呈していた。[48] 女子師範学校の卒業生のその後の動向を考える上で示唆的である。

当時の女子教育制度において生徒たちが高等小学校終了後、女子師範学校や職業専門校以外に進学先がなく、高等教育機関へのアクセスがないという問題は『女性専門新聞』誌上においても、顕在化していた。例えば、一八九五年に四回に分けて掲載された意見（mütalâa）には、子供（娘）の教育問題として高等小学校以後の教育の可能性を取り上げ、「どの文明国でも男性の学校と同等の内容の女性だけの学校が開かれている。女性は大学に入学でき、医学も法学も学ぶことが

表（二）女子師範学校の卒業者生（1894-1896,1901-1902）

卒業年度	名前	卒業後の進路
1894	Zekiye Hanım	イズミル高等小学校第一教師(muallim-i evvel)
	Sadiye Hanım	女子師範学校助手(muavene)
	Nimmet Hanım	モッラー・ギュラーニー高等小学校第一教師
	Remiziye Hanım	セラーニキ高等小学校第一教師
	Feride Hanım	女子師範学校助手
	Makubule Hanım	シヴァス高等小学校第一教師
	Fatma Hanım	女子師範学校助手
1895	Hayriye Hanım	女子師範学校助手
	Nevber Hanım	ウスキュダル女子技芸学校教師
	Binnaz Hanım	モッラー・ギュラーニー高等小学校教師
	Feride Hanım	女子師範学校教師
	Huriye Hanım	マナストル高等小学校第一教師
	Yaşar Hanım	イズミル高等小学校第二教師
	Naciye Hanım	女子師範学校助手
	Fethiye Hanım	アトバザル高等小学校助手
1896	Hatice Hanım	女子師範学校助手
	Zahide Hanım	フンドュクル(イスタンブル)の高等小学校教師
	Naziye Hanım	アクサライ(イスタンブル)女子技芸学校助手
	Kevser Hanım	ベシクタシュ(イスタンブル)の高等小学校教師
	Remziye Hanım	ブルサ高等小学校第一教師
	Sıdıka Hanım	ダマスクスの高等小学校第一教師
	Safvet Hanım	エユップ(イスタンブル)の高等小学校教師
	Adeviye Hanım	デニズリの高等小学校第一教師
	Ayşe Hanım	クルクキリセの高等小学校第一教師
	Hamide Hanım	寄宿制(leyli)女子技芸学校教師
	Seniha Hanım	全日制(nehari)女子技芸学校教師
	Refika Hanım	高等小学校教師
	Asiye Hanım	デニズリの高等小学校第一教師
1897	Talat Hanım	ミルギュン(Mirgün)の高等小学校教師
	Zehra Hanım	タシュルジャ（Taşlıca）の高等小学校第一教師
	Ikbal Hanım	サムスンの高等小学校教師
	Seher Hanım	ダマスクスの高等小学校第二教師
	Beyhan Hanım	K.ムスタファ・パシャ高等小学校教師
	Sabiha Hanım	サンドュクル(Sandıklı)の高等小学校教師
1900	Kevser Hanım	クルクキリセの高等小学校第一教師
	Fatma Hanım	セラーニキの高等小学校第二教師
	Zehra Fatma	ディヤルバクルの高等小学校第一教師
	Emine Şaziye	バクルキョイ(イスタンブル)の高等小学校助手
	Pederiye Hanım	高等小学校第一教師
	Emine Hanım	シェフザーデ(イスタンブル)小学校の第一教師
	Hatice Hanım	チョルムの高等小学校の第一教師
	Zehra Hanım	イスメハン・ゲヤスルタン小学校第一教師
1901	Zehra Hanım	トラブゾンの高等小学校第一教師
	Ayşe Mahmure	サムソンの高等小学校第一教師
	Melek Hanım	フブヤル(Hubyar) 高等小学校教師
	Feridiye Hanım	エディルネ高等小学校第二教師
	Hacer Hanım	エユップ高等小学校助手
	Tuti Zehra	スルタンアフメト高等小学校助手
	Saime Hanım	ミルギュン高等小学校助手
	Müberra Hanım	ロドス(Rodos)高等小学校第一教師
	Fatma Şükriye	アラソンヤ高等小学校第一教師
	Fatma Şehide	アンタルヤ高等小学校第一教師
	Cevriye Nefise	バフラ(Bafra) 高等小学校第一教師
	Nemciye Hanım	ウスキュダル高等小学校助手
1902	Afet Hanım	ビガ(Biga) 高等小学校第一教師
	Leyla Hanım	カドキョイ高等小学校裁縫(nakış)担当教師
	Şazmend Hanım	フンドゥクル(イスタンブル)高等小学校第二教師
	Nazmiye Hanım	エレリ(Ereğli) 高等小学校第一教師
	Hacer Hanım	アンカラの高等小学校第一教師
	Fatma Hanım	フィリベの高等小学校教師
	Zehra Fevziye	マニサの高等小学校教師
	Hüsna Hanım	デニズリの高等小学校第一教師

できる」とし[49]、編集部はまたアメリカの女子生徒が将来就きたい職業について記した一八七〇年と一八九〇年のアンケート結果を紹介し、アメリカでの若い女性の職業意識の変化を紹介している。そのアンケート上には技術者、法律家、会計士、医師、俳優、歯科医など様々な職業が紹介されており、いずれも当時のオスマン帝国内の女性が選択できる職業ではなかった[50]。

（三）二人の女性教師　ハリデ・エディプとアイシェ・スドゥカ

アブデュルハミト二世期の女子教育の現状と問題点を知る上で、スルタンの側近のオスマン官僚を父に持つ二人の女性を以下に取り上げたい。作家のハリデ・エディプ Halide Edip Adıvar（一八八四―一九六四）は、後にイスタンブル大文学部の教授となったことで知られ、アブデュルハミト二世に仕えた書記を父に持ち、『回顧録』の中で、自身が受けた教育について述べている。彼女は、父の方針で七歳から自宅で家庭教師について英語を学ぶとともに、祖母の方針でムスリム女性としての教養のためアラビア語などを自宅で学んでいた。彼女は一八七六年開校したアメリカ宣教団（American Board）による女子学校（Amerikan Kız Koleji）に入学し、そこで高等教育まで学んだ。しかし、スルタンの意向から初等部から学ぶことは許されず、中等教育段階からの入学であった[51]。後述するように、彼女はこの私立女子校で学んだ経験から、女子師範学校の再編に関わっていくことになる。

アイシェ・スドゥカ Ayşe Sıdıka（一八七二―一九〇三）は宮廷の教師（Enderun hocası）で、アブデュルハミト二世期にイルミエの高位職にいたウラマーを父に持ち、ギリシア正教徒の女子校（Zapyon Rum Kız Lisesi）の初等部で学び、その後、試験を受けて女子師範学校に入学した。ここではフランス語、英語などを学んだと考えられる。一八九一年に卒業し、一八九三年に女子師範学校に就職して地理学、道徳、裁縫を担当するとともに、教育法（Usul-i Tedrîs）と教育学（Fenn- i Terbiye）を講じた[52]。彼女は授業の傍ら女子教育と教育法を一冊の本『教育と教授法 *Usûl-i Talim ve Terbiye*

Dersleri』にまとめ、アブデュルハミト二世に献じた。

この二人の教育歴を見ると、父親がアブデュルハミト二世の側近ながら非ムスリムの学校で初等教育を学んでおり、女子にとり公教育以外にも教育の機会や学校の選択肢が広がっていたといえる。公教育において、男子と同様の中等学校（idâdi）の設立が模索され、一八八〇年にイスタンブルでトルコ語や一般教養の他にフランス語、ドイツ語、英語、音楽、手芸などを学ぶ学校が開かれたものの、二年で閉校になったという。[53]『帝国年鑑』によると、一九〇六―〇七年に存在した中学校のうち、女子校はマナストルに一校存在したが、その内容については不明である。[54]

第五章　第二次立憲政期における女子教育の刷新と女子師範学校

（一）　青年トルコ人革命と女子教育　―批判される女子師範学校―

青年トルコ人革命（一九〇八）後の第二次立憲政期（一九〇九―一九一八）に入ると、政府の主導で女子教育の刷新、特に中等・高等教育機関の設置について論議がより活発になされていくようになった。そのきっかけとなったのが、女子教育の現状に対する外国人女性の指摘や公教育以外の学校で教育を受けたオスマン女性たちからの批判である。これは「専制」が終焉し自由な言論が可能となり、さらに私立の女子教育機関が増えた等の状況の変化から、公教育が人びとの比較の対象となった背景も考えられるだろう。

青年トルコ人革命を指揮した「統一と進歩委員会」（以後「統一派」と略記）の機関紙『*Tanin*』には、一九〇九年、英国人のイザベル・フライと名乗る女性がオスマン帝国の女子教育に関しての報告を寄せている。フライはイスタンブルを中心に女子校を視察し、「女子校には概して学校の建物、長机（sıra）や教具類が不足し、教師も教育法の面からの資質が不足している。教育の質の向上にはまず女子師範学校の改革から着手するべきである」と述べた。[55]イザベルと親交のあっ

たハリデ・エディプは同じ紙面で母校のアメリカン女子校の教師を「知識と文化の格闘者（mücahid）」として敬意を表した。その一方で「我々の女子師範学校は、教師も生徒も批判しうる。（中略）トルコ語と英語は必須の授業であり、可能であれば英語で授業を行うべきである。（中略）さまざまなテーマの教科書が書かれ、または翻訳されなければならない。女子と男子のために異なった教育がなされるのは認めてはならない。このため、イギリスから価値ある教師たちを招き、トルコの学校の整備に助力を仰がねばならない。」と述べた。[56]

女子師範学校への厳しい批判は、当時の女性雑誌上でも認められる。例えば、一九〇八年から一九一〇年までセラーニキ（現テッサロニキ）で『*Tanin*』紙の支援のもとに発行された『女性（*Kadın*）』は、主筆のエニス・アヴニ（Enis Avni）を中心に様々な女性にまつわる社会問題を取り上げ、その記事に対し、読者が意見を述べ記事を書くなど、読者との対話を視野に入れた雑誌であった。そこで主筆が一九〇八年にイスタンブルで開校した私立オスマン統一女子校（İnas-i İttihad-i Osmani Mektebi）についての展望を書いたところ、セラーニキ在住のゼキエ（Zekiye）がその主張には賛成したものの、当地の女子小学校と女子高等小学校で教鞭をとる女子師範学校卒の教師たちの現状を批判し、彼女たちの教育能力を問題視した発言が物議を醸した。[57] 私立オスマン統一女子校とは「統一派」のイデオローグであったアフメト・ルザ（Ahmet Rıza　一八五八―一九三〇）が「統一派」有志とともにオスマン銀行の財政支援を受け、マクリキョイ（バクルキョイ）に開校した学校で、四歳の幼稚部から初等、中等、師範課程（Dârülmuallimât Şubesi）まで幼児期から青年期までの女子一貫教育を行った。[58] これは当時オスマン帝国内でのアメリカ宣教団やカトリック修道会が行っていた女子一貫教育を参考に、トルコ語とフランス語の普通科教育を行いながら最終的に女性教師の養成を目的とする女子校であった。しかし当該女子校は、従前の公教育制度、すなわち、女子の最終進学先として女子師範学校が位置付けられている制度を一貫教育のもと再編しただけではないかと疑問視される危険性があった。ゼキエはこの点に着目し、現在の女性教師たちの資質が問題となっているにも拘らず、彼女たちが新しい女子一貫校の教壇に立つのは如何なものかと問いかけた。[59] この意

見に対し、女子師範学校出身のナキエ（Nakiye）とファズィラ（M.R.Fazila）二名の読者女性が反論した。ナキエは女子師範学校が資質に問題がある女性だけで構成されていないこと、そのような批判は本来公教育省に向けられるべきことであるとした上で、女性教師職が薄給であるため、能力ある人材が地方の女子校へ派遣され難い事情も関係するのではないかと述べている。[60] 一方、セラーニキ在住のファズィラはゼキヤが言及する資質の劣った女性教師たちは女子師範学校の卒業生ではなく、セラーニキの私立女子校の出身であり、そもそも比較の対象にはならないと憤慨した投稿を寄せていた。[61]

「統一派」による私立女子一貫校開校の後、一九一三年イスタンブルでイスタンブルスルターニー女子校（İstanbul İnâs Sultânî）が幼稚舎を含む、小学校五年、中学校五年の一〇年制の一貫教育校として開校したものの、中等部では従来の高等小学校の科目を踏襲するにとどまっていた。[62] 公教育における女子中等・高等教育機関の設置問題は、高等小学校以後の女子教育に何が必要かとの根源的問題に直面するとともに、新たな進学課程の付与は学習の長期化を招き、結婚や出産など女性のライフサイクルに影響を与える課題も現出した。

このような実情が次第に既存の女子教育制度の枠内で、組織の改編等を通じて諸問題を解決する動きに向かったと考えられる。最初に着手されたのは、教育現場周辺で指摘された女性教師の質を向上させる取り組みであった。

（二）女子師範学校の再編と「女子」大学の成立

女子師範学校は一九一〇年、ファーティフ地区の寄宿施設を備えた女子技芸学校に校舎を移し、寄宿施設を備えた学校（Leyli Dârülmuallimât）として再編される。

フライは「女子師範学校の学生は健全で知的、なおかつ道徳的な教育がなされるために全寮制が必要」と提言し、[63] 女子技芸学校でも寄宿制を採用していることから決定されたと考えられる。すでに公教育省のエムルッラーフ（Emrullah Efendi）がアレッポ、アンカラ、カスタモヌ、アマスヤなどから女子師範学校への入学希望者を募っていた。[64] また、表

（一）を見てもわかるように、女子師範学校への入学者が第二次立憲政期に入り年々増加しており、首都以外からの入学希望者の便宜を図る必要性が出てきたことも設置の理由である。先に示したように、アブデュルハミト二世期に拡充された地方の女子高等小学校には女子師範学校の卒業生が一定数就職しており、地方の女子校では女性教師の確保が急務であった。なお、全日制の女子師範学校は一八七三年に初めての卒業生を輩出して以来、一九一〇年までに七三一名に女子高等小学校の教員資格を与えたことになる。

この寄宿制の導入を契機として、女子師範学校では様々な改革が着手される。翌年、チャパ地区に移転し、ＩＫＭによれば、一九一〇―一一年の女子師範学校の教員は、二五名であった。[65] 元オスマン官僚で文筆家のアフメト・ミドハト（Ahmed Midhat; 一八四四―一九一二）が教壇に立ち、文明論（Malûmat-ı Medeniye）と道徳を担当した。[66] アフメトは師範学校在職時に約九〇人の学生がいたことを伝えている。[67] しかし翌年、アフメトが急逝したため、女子師範学校の改革を提唱していたハリデ・エディブを採用しようとしたところ、認められなかったという。[68] また一九一二―一三年には外国人の女性ラリ（Ralli）が校長のムスタファ・レフィク（Mustafa Refik）を補佐する副校長（Evvel mektebe mürebbiye）に就任している。[69] フライは女子師範学校の改革案として帝国外から外国人女性校長を提示していたから、それを一部受け入れたことになる。

一九一三―一四年には学生に教師となる上での心得や技術を学ばせる実習科（tatbikat kısmı）が設けられ、初年度は外国人を含む七人の女性教師（Aleksanyan, Hürmüz, Asiye, Lutfiye, Hamide, Fatma Behiye, Huriye）が担当した。実習授業を担当した教師は同時に授業の助手（muidelik）や生徒の監督をする責務があったという。[70] 一九一四年には幼稚舎教諭養成部（Ana Muallim Mektebi）が設置され、一九一四―一五年度の生徒数は幼稚舎部一一六名を含めると在籍数は四二五名にまで増加した。[71]

一九一五年、師範学校と女子師範学校に関し、新たな法（Dârülmuallimîn ve Dârülmuallimât Nizâmnâmesi）が発布され

た。ここでは三年制の高等師範部（Dârülmuallimât-ı Âliye）が新たに開設された。[72] これにより、女子師範学校は小学校師範部（ibtidâî）高等師範予備門（ihzârî）高等師範部（âlî）の三つの課程から組織され（一条）、各修業期間は小学校師範部が五年、高等師範予備門が二年、高等師範部が三年と定められた。小学校師範部を卒業した者は小学校教師の資格を与えられ、高等師範予備門を卒業した者は小学校師範部の教師と視学官（müfettiş）としての資格を、文学（edebiyât）、自然科学（tabiiyât）、数学（riyâziyyât）科に分かれていた高等師範部には中学校、高等教育の教師の資格が与えられた。なお、幼稚舎教諭養成部（修業期間一年）と付属幼稚舎（Ana Mektebi）も高等師範部の附属とした（二条）。

今回の改組の大きな特徴は、（一）幼児教育から高等教育までの教師、及び視学官の資格を付与する、いわば女子教育に従事する専門家の養成機関としての性格を明確化したこと（二）高等師範部を「大学」に相当する専門的学問を修得する機関としたことの二点であった。視学官とは、オスマン帝国内の学校を視察し、教育現場の状況を報告する役目を担う公教育省の専門官であり、ハリデ・エディプのほか、女子師範学校教諭ナキエ・エルギュン（Nakiye Elgün）、女子高等師範部出身のシュクーフェ・ニハル（Şükufe Nihal）ら女子師範学校出身者がこの後視学官として活躍した。[73] 公教育省の文書によると、一九一四年に「フランスに留学中の非ムスリム女子四名のうち、誰が女子師範学校に進学する予定なのか、将来女子校で雇用する際に必要な情報を知らせるように」とあり、女子師範学校の入学予定者の資質について公教育省側が把握しようとしていたことがわかる。また、一九一八年には「女子小学校において教育の質を向上させるために女子師範学校を卒業した女性を教師に任じるように」とあり、国家が女子師範学校の再編を通じて、帝国内の女子教育を統一的に管理する体制を確立しようとしていた。[74]

高等師範部は、高等教育までの教員養成を目的とするとはいえ、未だ女子の高等教育機関が整備されていない現状を考えると、事実上「女子」大学の設置を意味した。女子の高等教育機関はすでにアメリカ宣教団が開校（Üsküdar Amerikan Kız Koleji）していたが、公教育では実現していなかった。しかし、一九一四年にはすでに諸学の館（イスタンブル大の

前身）では女性のために歴史学、衛生学、教育学等の講義を行っていたから、公教育においても高等教育進学課程を早急に設置する必要があった[75]。一九一五年女子高等師範部とともに、諸学の館女子部（İnâs-ı Dârülfünûn）の設置が発表され、女子高等師範の校舎内で授業が開始された。高等師範部は正式に大学となったことになる。一九一五―一六年度で、女子高等師範部は四九九人の寄宿生と二八一人の全日制の学生が在籍していたものの、諸学の館女子部には九人の女子学生しかいなかったという[76]。高等師範部は女性教師を目指す大半の学生と大学で専門的学問を学ぶのを希望する学生に二種の学生により構成されていたと考えられる。

すでにアブデュルハミト二世時代から、女性の高等教育問題は論議されてきたが、第二次立憲政期に急に進展し、女子のための大学開設に至った理由はなぜであろうか。これは様々な角度から検討しなければならないが、すでにデュベンらの研究でも指摘されているように、バルカン戦争、第一次世界大戦と相次ぐ戦争で青年男子の人口が減少し、社会における女性の労働力、活躍が求められていた時代背景を考慮に入れねばならないだろう[77]。事実、諸学の館では戦争により男子学生数が急激に減少し大学の講義自体の成立が危ぶまれており、とりわけ文学部においてその傾向が強かった[78]。アルスランも指摘するように、諸学の館女子部が開設されたのは、諸学の館の教授が中心となり、女子を受け入れる体制を整えていたことも大いに関係するだろう[79]。

高等師範部が諸学の館に吸収される形となったため、一九一六年には高等師範予備門は最初の卒業生を出したものの、その役割を終え、同年に閉鎖が決定した。また開設以来、三七〇人の幼稚園教諭を養成した幼稚舎部も同じく閉鎖された。そして一九二二年に女子師範学校はトルコ大国民議会政府（Büyük Millet Meclisi Hükümeti）の教育省に属する教育機関となり、一九二四年にイスタンブル女性教師養成校（İstanbul Kız Muallim Mektebi）と名称を変えた。ここに、女子師範学校は五四年に渡る歴史に幕を閉じた。

おわりに

オスマン帝国近代の社会と女性にとり、女子師範学校はどのような意義を持っていたのであろうか。これまで述べて来た論点を整理し総括としたい。

女子師範学校の成立の意義は三つある。それは第一に女性教師育成校としてオスマン帝国近代の女子教育を常に支える存在であったことである。タンズィマート期、アブデュルハミト二世期、第二次立憲政期のいずれにおいても、女子教育制度は女子師範学校進学を念頭に、学校制度の改編がなされていたのは注目すべきであろう。ただし、女子師範学校は公教育機関としての性格上、常に政権の教育行政に左右されたから、独自的な教育内容を提供したとは言えない。第二次立憲政期には幼稚園教諭から高等教育機関までの教員資格を付与する、女子教育機関となり、多数の卒業生を輩出するまでになった。また、公教育省の機関として女子教育制度の地方への普及を促進させたと言えるだろう。

第二に一部の学生に給与、実質的には奨学金を支給して、寄宿制度を備えたことで、女子教育が首都の富裕家系の独占とはならず、出自に寄らない、様々な背景を持つ女性に進学する機会を与えていた可能性がある。

第三にオスマン帝国末期には、女子師範学校が高等教育を実践する場となった意義は大きい。高等師範部はトルコ共和国成立後、独立した女子大学とはならずにイスタンブル大学に吸収された。すでに諸学の館の教授が高等師範部へ出張講義を行い、事実上大学の一部となっていたから、当然の帰結と言えるかもしれない。しかし、このような実践を通じ、慣習化していた男女別学の教育が高等教育においては必ずしも重要な意味を持たないことを証明した意義は深い。

第二次立憲政期における女子師範学校は高等教育を実践する場であるとともに、幼稚園教諭を多数輩出した機関でもあった。この時期にİKMの在籍者数が膨大になるのは、この幼稚舎部の併設も原因ではないかと考える。このような

女子師範学校、および女性教師の「大衆化」もトルコ共和国成立後の女性の社会進出を考える上での示唆となろう。今後の研究の課題としたい。

付記　本稿は日本学術振興会科学研究費「近代オスマン帝国における女子教育」基盤研究C（二〇一二年度～二〇一四年度）（課題番号二四五二〇七九七）の助成による研究成果である。

註

（1）Osman Nuri Ergin, *Türkiye Maarif Tarihi*, C.I-V, İstanbul, 1940-1944; Yahya Akyüz, *Türk Eğitim Tarihi*, Ankara, 1982; "Öğretmenlik Mesleği ve Osmanlı'da *Kadın* Öğretmen Yetiştirilmesi" *Tarih ve Toplum* 195, 2000, pp.31-43 ; Şefika Kurnaz, *Cumhuriyet Öncesinde Türk Kadını 1839-1923*, İstanbul, 1992; S.K.Somel, "Osmanlı Modernleşme Döneminde Kız Eğitimi.", *Kelebiç* 10, 2000, pp.223-38; Mustafa Şanal, "Osmanlı İmparatorluğunda Kız Öğretmen Okulunda Görev Yapan *Kadın* İdaresi ve Öğretmenler ile Okuttukları Dersler." *Belleten* 68-253, 2004, pp.649-670; Yasemin Tümer Erdem, *II. Meşrutiyet'ten Cumhuriyete Kızların Eğitimi*, Ankara, 2013; 長谷部圭彦「オスマン帝国の女性と教育　女子師範学校の試み」（永井万里子他編『女性から描く世界史一七～二〇世紀への新しいアプローチ』勉誠出版、二〇一六年）この中で女子師範学校に関する専論は、Şanal と長谷部である。Ergin、Akyüz、Somel、Erdem は近代教育制度史の、Kurnaz は女性史とフェミニズムの観点から女子師範学校について言及している。

（2）Ali Arslan, Mustafa Selçuk, Mehmet Nam, *Türkiye'nin İlk ve Tek Kız Üniversitesi İnas Darülfünunu（1914-1919）*, İstanbul, 2012.

（3）Yahya Akyüz, "Tanzimat' tan Cumhuriyet'e Okul Yöneticiliği," *Tarih ve Toplum* 35/207. 2001, pp.57-63.　秋葉淳「タンズィマート以前のオスマン社会における女子学校と女性教師―一八世紀末～一九世紀初頭イスタンブルの事例から」『オリエント』五六―一、二〇一三年、八四～九七頁

（4）BOA（Başbakanlık Osmanlı Arşivi（トルコ首相府オスマン文書館）所蔵 CM（Cevdet Maarif）1721（1158/1174-75）. 二〇一八年当該文書館はトルコ大統領府の管轄 Türkiye Cumhurbaşkanlığı devlet arşivleri başkanlığı となった

が、本論文では便宜上調査時の旧文書館名と文書番号を使用する。

（5）BOACM 7613（1186）.

（6）一八六九年の「公教育法」の区分では高等小学校に相当する。

（7）*Düstur*,1. Tertip,c.II, Mad 9, Mad 71.

（8）男女の入学年齢の差異について公式の説明は一切されていない。後述のように女子の場合中等教育以上の公教育が当初想定されておらず、女性のライフサイクル上結婚や出産に適した年齢との関係から入学時期を早めた可能性はある。小学校に四年、女子高等小学校に四年通うと卒業時は一四歳となる。アブデュルハミト二世時代に試みられた女子教育改革の骨子では、女子の九歳をイスラーム法上「成熟した年齢」としている。

（9）*Düstur*,1. Tertip,c.II, Mad 6.

（10）オスマン帝国近代の新式学校の体系については、小林馨「オスマン帝国の官立学校における人材育成―ガラタサライ帝室学校における卒業生の動向を中心に―」『駿台史学』第一五二号、二〇一四年、二五～五一頁：長谷部圭彦前掲書「オスマン帝国の女性と教育　女子師範学校の試み」に詳しい図が記されている。

（11）*Düstur*,1. Tertip,c.II, Mad 29.

（12）ルスチュク他ミドハト・パシャのトゥナ（ドナウ）州における諸改革については、佐々木紳「岐路に立つタンズィマート」小松久男編『歴史の転換期九 一八六一年改革と試練の時代』山川出版社、二〇一八年、七四～一二七頁に詳しい。

（13）*Takvîm-i Vekayi*, 25 Muharrem 1287, No 1217.　これは厳密には高等小学校部（三年制）の教師となるための規定である。

（14）*İstanbul Kız Muallim Mektebi Darülmuallimat*, İstanbul,1933, p.3 .（以後 İKM）これは女子師範学校とトルコ共和国におけるイスタンブル女性教師養成校に関してまとめられた年鑑（1870-1933）である。そこには卒業生の名前と在籍者数が主に記されている他、教師や担当科目の情報、政府からの通達類も断片的ながら掲載されている。必ずしも史料の典拠が明白ではないものの、女子師範学校内部の者が記録したと思われ、史料的価値は高い。この史料の入手にあたっては長谷部圭彦氏の助力を得た。ここに謝意を表したい。

（15）「女性たちよ、創造性が必要とされるいかなる類のものにも敬意を表するのが相当なように、教育で学業を監督する者たちにも関心を払う必要がある。一人の子どもがゆりかごから学校へ通うまでの間は、母親の教育のもとにあるのみである」（*Takvîm-i Vekayi*, 25 Muharrem 1287, No 1217.）

（16）*Ibid*.

（17）*Ibid*.

(18) 雑誌『進歩』には、ムスリム女性の投稿で、ギリシア正教徒の女性たちが家庭で行う縫製の仕事をムスリム女性もできないかと問いかけていた。詳しくは拙稿「オスマン帝国近代における「女性」誌の誕生（一八六九―一九〇九）」『人文科学研究』一二、二〇一六年、二六九～二八一頁を参照。

(19) İKM,p.6. 裁縫の教師としてHatçe Hanım, Madam Armik絵画担当教師としてMadam Balkerが採用された。

(20) BOA MF（Maarif Nezareti）.MKT（Mektûbî Kalemi）12/73, 1873年には授業のためにﾞﾐｼﾝ（dikiş makinesi）を購入している（BOA MF.MKT 4/176）。

(21) *Sâlnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*,1294 p.9.

(22) BOA MF.MKT 431/34. 1900年の記録では中学校と陸軍学校の学生の何人かが校舎の周りをうろついていたとの苦情が寄せられていた。

(23) 『帝国年鑑』をもとに卒業生を算出したクルナズの表とは若干の誤差が出ている。本稿ではİKMのデータをもとに作成した。Şefika Kurnaz, Yenileşme sürecinde Türk Kadın *1839-1923*, p.56. なお、制度の改変で一時二年制と三年制になったが、その学年別の在籍数が判明している場合は、学年毎の数となっている。

(24) *Sâlnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*, 1294, pp.391-394., Osman Ergin, *Türkiye Maarif Tarihi*, C.II. İstanbul, 1940,p.740.

(25) *Sâlnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*, 1351,pp.241-253., Şefika Kurnaz, *Yenileşme sürecinde Türk Kadını 1839-1923*, p.41.

(26) S. K. Somel, "Osmanlı Modernleşme Döneminde Kız Eğitimi"*Kelebiç* 10, 2000, pp.229-231.

(27) BOA YMTV（Yıldız Mütenevvi Maruzat Evrakı）25/52, S. K. Somel, "Osmanlı Modernleşme Döneminde Kız Eğitimi"*Kelebiç* 10, 2000, p.229.

(28) *Sâlnâme-i Nezâret-i Maârif-i Umûmiyye*, 1316, p.393.

(29) BOA, İD（Irade Dahiliye）02248/1-2., Mustafa Şanal, "Osmanl İmparatoluğunda Kız Öğretmen Okulunda Görev Yapan *Kadın* Idaresi ve Öğretmenler ile Okuttukları Dersler." *Belleten* 68-253, 2004, pp.649-670.

(30) *Sâlnâme-i Nezâret-i Maârif-i Umûmiyye*,1317 pp.321-322.

(31) *Ibid*.

(32) İKM, p.23.

(33) *Sâlnâme-i Nezâret-i Maârif-i Umûmiyye*,1317 pp.321-322. 女性雑誌の検閲問題は前出の拙稿を参照。

(34) İKM, p.6.

(35) *Ibid*.

(36) BOA MF.MKT 2/174

(37) İKM, p.6.

(38) Osman Nuri Ergin, *Türkiye Maarif Tarihi*, C. II, İstanbul, 1940-1944, p.674.

(39) BOA MF.MKT 12/73.

(40) BOA MF.MKT 12/94. アキフ・エフェンディは Odabaşı Çarşısı で新設される男子校に異動となり、代わりに女子師範学校卒の者に職が与えられたという。

(41) BOA MF.MKT 12/130, İKM, p.7. レフィカは 1882-1883 年度に副校長を務めている（İKM, p.12）。

(42) *Sâlnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*, 1300, pp.192-193.

(43) BOA MF.MKT 139/133.

(44) BOA MF.MKT 184/30. 1895 年刺繍の教師として Kevser Hanım がアレッポにある Haleb İnas Rüşdiye Mektebi に赴任し、同じくマナストルにある女子高等小学校に女子師範学校卒の Ahsem Hanım が派遣されることになったという。

(45) BOA MF.MKT 366/23.

(46) İKM, p.13. ただし Arife のみ Afife Hanım と記されており、誤記か別人の可能性もある。また在籍はしていても卒業していなければ名簿に記載されないため、Arife は卒業していない可能性もあるだろう。

(47) Şükûfezâr 11-1, 1887. この雑誌とオスマン帝国近代の女性雑誌の興隆については前出の拙稿を参照。

(48) *Ibid.*, 1 3-9.

(49) *Hanımlara Mahsûs Gazete* 20: 1-2, 1895.

(50) *Hanımlara Mahsûs Gazete* 28: pp.650-651, 1903. 一八七〇年と一八九〇年にアンケートを実施。女性が就ける、または就きたい職業は、会計士、建築家、法律家、美容師、歯科医、ジャーナリスト、舞台監督、作家、芸術家、公務員、医師、女優、音楽家、事務員となっており、これらの職業に就くにはより高度な勉強が必要であった。なお、教師は将来就きたい職業の中には含まれていなかった。会計士は一八七〇年のアンケート時には全く希望者がいなかったにもかかわらず二七、七七七人にも増加し、技術者、法律家希望者も増加していた。

(51) Halide Edip Adıvar, *House with Wisteria: Memoirs of Turkey Old and New* 2nd Edition, NewYork, 2017.

(52) BOA MF.MKT 134/108 アイシェは女子教育の上で初めて学科の教授法を説き、スルタンにも教育の刷新を提言していたとされる。早世したが、公教育省文書にはしばしば言及がある。

(53) Hasan Ali Koçer, *Türkiye'de Modern Eğitim Doğuşu ve Gelişimi*, Istanbul,1970, p.131.

(54) *Sâlnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmanîyye*, 1328, pp.336-399.

(55) İsabel Frey, "Kız Mektebleri Hususunda Bir Mütalaa-i Mühimme", Tanin, 18 KS, 1909., pp.20-21. ; Şefika Kurnaz, *II. Meşrutiyet Döneminde Türk Kadın*, İstanbul, 1996., pp.92-93.

(56) Halide Edip, "*Kadın*lar için", *Tanin*, 31 TE 1908, p.2. ; Şefika Kurnaz, *II. Meşrutiyet Döneminde Türk Kadın*, İstanbul, 1996., pp.38-39.

(57) Enis Avni,"Osmanlı *Kadın*ları Cemiyet-i Mütesekkilesi", *Kadın* 17, 1324/1908, pp.2-5.

(58) この女子校は Yasemin Tümer Erdem, *II.Meşrutiyet'ten*

Cumhuriyet'e Kızların Eğitimi, Ankara, 2013. に詳しい。

（59） Zekiya, "İki İhtiyaç-ı Mübrem", *Kadın* 18 1324/1908, p.6.

（60） Nakiye, "O İki Noksan Münasebetiyle: Zeliye Hanımefendiye", *Kadın* 20, 1324/1908, pp.6-7.

（61） M.R.Fazıla, "O İki Noksan Münasebetiyle: Zeliye Hanımefendiye", *Kadın* 22, 1325/1909, p.7.

（62） Osman Nuri Ergin, *Türkiye Maarif Tarihi*, C. IV İstanbul 1940-1944, pp.1192-93.

（63） İsabel Frey, "Kız Mektebleri Hususunda Bir Mütalaa-i Mühimme", *Tanin*, 18 KS, 1909 pp.20-21. 女子師範学校を改善する上でのフライの提言は、イギリスやアメリカなどの出身女性を校長につけること、外国人校長がトルコ語を解さないならばトルコ人の女性の校長も選ぶこと、学校のそばに学生のために補習校を作ることであった。

（64） BOA MF. ALY（Tedrisat-ı Aliye Dairesi）, 35/28. 八六人の女子が首都にやってきたという。

（65） İKM, p.42.

（66） İKM, p.42.

（67） Ahmet Midhat, "Darülmuallimâtımız", *Sabah*, 9, 1910, p.3.

（68） İKM, p.43. 採用されなかった理由は述べられていない。

（69） İKM, p.44.

（70） İKM, p.43.

（71） İKM, p.45.

（72） İKM, p.52-53.

（73） ハリデ・エディプは後に視学官としてアレッポに赴き、その調査の結果、当地に小学校を開設した。女性の視学官については別稿で論じる予定である。

（74） MF.MKT.1174/97,1329.

（75） 諸学の館の講堂（konferans salonu）で週に四回開かれ、その大半が女子師範学校の学生であった。Ali Arslan, Mustafa Selçuk, Mehmet Nam, *Türkiye'nin İlk ve Tek Kız Üniversitesi İnas Darülfünunu（1914-1919）*, İstanbul, 2012, pp.23-28.

（76） MF.MKT.1223/47,1335.

（77） Alan Duben & Cem Behar, *Istanbul Households: Marriage, Family and Fertility, 1880-1940*,1991,Cambridge University Press, Revised Version, 2002. 等の研究から第一次世界大戦期を境に女性の社会進出が顕著となっていく状況が指摘されている。

（78） İKM, p.52-53.

（79） Ali Arslan, Mustafa Selçuk, Mehmet Nam, *Türkiye'nin İlk ve Tek Kız Üniversitesi İnas Darülfünunu（1914-1919）*, İstanbul,2012, pp.18-19.

（東京大学東洋文化研究所　特任研究員）

（写真）共和国初期のイスタンブル大